

## 恋愛経験と理想的な恋人の特性

玉宮 義之<sup>1</sup>・澁澤 茉利亞<sup>2</sup>

若者にとって、恋愛とは大きな関心事の一つである。学生同士で恋愛に関する話をする、男女ともに盛り上がるができる。その中で「好きな異性のタイプ」の話は話題に上がる事が多い。多川（2003）は、「青年期は異性との関係に興味をもち始める時期であり、結婚と家庭生活の準備期とも言えることから、青年にとって恋愛関係は重要だろうと思われる」（p.251）と述べた。恋愛に関する様々な研究がこれまでに実施されており、恋愛へのイメージや考え方、恋人がいる者といない者の比較など多岐にわたる。例えば、高坂（2009）は恋愛関係が大学生に与える影響として、「自己拡大」、「充足的気分」、「拘束感」、「関係不安」、「経済的負担」、「生活習慣の乱れ」、「他者評価の上昇」の7因子の存在を確認した。天谷（2005）はLeeの恋愛6類型を用いて、大学生における恋愛相手と将来の結婚相手に対する感情や態度を質問し、両者間への認識の違いを研究した。また、「恋人に求める特性や性格」に関する研究も多く実施されている。例えば、個人が持っている理想的な恋人の特徴と現在または潜在的な恋人の特性の適合度が恋人の選択・評価などに対して影

---

<sup>1</sup>白鷗大学教育学部

<sup>2</sup>日光金属株式会社

責任著者e-mail: tamamiya@fc.hakuoh.ac.jp

\*本研究は、第二著者が2018年度に白鷗大学教育学部の卒業論文として提出した論文を第一著者が再編集したものである。

響すると仮定するIdeal Partner Preference-Matching 説が提唱されている (Eastwick, Finkel, & Simpson, 2019)。戸塚 (2014) は大学生の実際の恋人選択を理解するために、相手が理想的にもってほしい性格特性のレベルだけでなく許容範囲についても研究した。この研究では性別によって許容範囲に差は出なかったが、「意志の強さ」や「誠実さ」の特性において男女ともに許容範囲が狭く、高いレベルで期待していた。つまり、大学生が恋人を選択する際に、「意志の強さ」や「誠実さ」を重視していることが明らかになった。高坂 (2010) は大学生に同性友人、異性友人、恋人の3者に対する期待を回答してもらい、対象別、性別に分析することで大学生における3者の意味づけを明らかにした。この研究では大学生における3者への期待を構成する因子として「信頼・支援」、「外見的魅力」、「他者配慮」、「積極的交流」、「相互向上」の5因子が抽出された。それによると、男性は恋人に対して「外見的魅力 (外見が魅力的であることを期待する)」への期待が女性よりも比較的高くなる傾向が見られた。この傾向はYijun (2009) の研究でも見られた。加えて、高坂 (2010) では女性は恋人に対して「信頼・支援 (自分を理解してくれて、困ったときには助けてくれることを期待する)」への期待が男性よりも比較的高くなる傾向が見られた。このように、個人が恋人に求める特性や性格は性別によって期待する特性や期待の程度は異なっていることが分かる。

しかし、高坂 (2010) には研究の限界が存在する。同研究の本調査の実験参加者が調査当時に「同性友人」、「異性友人」、「恋人」が全ていた人に限定されていたことである。これでは研究結果を一般化するのには注意が必要である。

現状を見てみると、ここ数年恋人のいない若者が年々増加傾向にある。余田 (2016) によると、交際している異性がない18~34歳未婚者の割合は男性では2002年調査から、女性では2005年調査から増加している。最新データである2015年調査では、男性では約7割、女性では約6割の18~34歳の未婚者が交際している異性がないことが明らかになっ

た。「恋人を欲しいと思わない青年」の心理的特徴について研究した高坂(2011)の研究でも実験参加者の1343名の大学生のうち、調査当時に恋人のいなかった人は男性では約7割、女性では約6割存在した。

このような状況を研究計画に取り込み、研究実施時の恋人の有無と期待する特性の関連について検討した研究が行われている(Eastwick, Finkel, & Eagly, 2011)。例えば高坂(2011)の研究では恋愛群(恋人がいる人)、恋愛希求群(恋人がいなく恋人がほしい人)、恋愛不要群(恋人がいなく恋人は欲しくない人)のアイデンティティ確立の程度を比較した。それによると上記3者の中で恋愛群、恋愛希求群、恋愛不要群の順でアイデンティティ確立の程度が高い結果になった。またYijun(2009)は青年の恋人選択とアイデンティティ確立の関係を研究した。この研究の中では、恋人選択で女性の外見的魅力や面白さを重視する男性グループが比較的アイデンティティ発達の程度が低い結果になった。2つの結果を混同するのは根拠がなく妥当性は低いが、併せて考えると恋人のいない人は恋人選択において相手の外見的魅力を重視するのではないかと予測される。

このように恋愛に関する研究は幅広く行われているが、「恋人のいない人」が恋人に求める特性については十分に解明されているとは言いがたい。そこで今回の研究は、恋人の有無によって個人が恋人に求める特性に現れる変化や差の検討を目的とする。上記で挙げた大学生における恋愛関係の影響と交際期間との関連を研究した高坂(2009)では、恋愛関係が学生に与える影響として「自己拡大」因子が見られた。この因子は異性と付き合うことで幅広い領域への動機付けがなされ、自己概念が広がったことを表す因子である。過去に異性と付き合ったことにより、このような影響があったとすれば「恋人がいない人」の中でも、「以前は恋人がいたが、今は恋人がいない人」と「今までずっと恋人がいなかった人」の間にも恋人に期待する特性について違いがあると考えられる。そのため今回の研究では実験参加者を「現在、恋人がいる人」、「以前は恋人がいたが、今は恋人がいない人」、「今までずっと恋人がいない人」の3群に分けて調査する。

## 方法

### 対象者

19～22歳の大学生132名（そのうち男性70名、女性62名）に質問紙調査を実施した。平均年齢は19.36歳であった。

### 質問紙

本調査ではフェイスシートとして「1.性別」、「2.年齢」、「3.今まで特定の人と恋人関係にあったことがあるか」、(3.で「はい」と答えた人のみ)「4.現在、恋人がいるか」をたずねた。

豊田（2004）で用いられた「優しい」、「容姿がよい」、「お金持ちである」などの24特性を使用した。これは豊田（2000a）において「大学生における男女それぞれに好かれる男性像、女性像」について自由記述された特性の中で頻出度の高かった項目を集めたものである。本研究では現代の傾向から「男らしい／女らしい」の特性を除いた全23特性で調査を行った。質問は「今後、あなたが新たに誰かと恋人関係を持つとして、その相手に以下の特性をどの程度期待していますか」という前提で、各特性に対して「1.全く期待しない」、から「6.非常に期待する」の6件法で回答を求めた。

### 手続き

回答してもらうにあたり、参加は自由意思によるものであること、本人の意思で参加を中止可能であること、質問紙は厳重に保管しプライバシーの保護を徹底することを事前に説明した。実験参加者には研究参加同意書を読んでもらい、同意出来る場合には署名をお願いした。質問紙内で現在の恋人の有無を問う項目が存在するので、プライバシー保護のため質問紙回収時に研究参加同意書と質問紙本体を分離して回収した。

## 結果

### 恋人の有無による実験参加者の人数構成

質問紙のフェイスシートで示した「3. 今まで特定の人と恋人関係にあったことがあるか」、(3. で「はい」と答えた人のみ)「4. 現在、恋人がいるか」の回答によって実験参加者を3グループに分けた。今回の研究では上記両方の質問で「はい」と回答した「現在恋人がいる人」を現恋愛群、4.の質問で「いいえ」と回答した「以前は恋人がいたが、今は恋人がいない人」を元恋愛群、3.の質問で「いいえ」と回答した「今までずっと恋人がいなかった人」を未恋愛群とした。上記で分けた3グループの人数構成と男女分布をTable 1に示した。

Table 1. 実験参加者の条件ごとの人数構成

	現恋愛群	元恋愛群	未恋愛群	合計
女性	18 (29.03%)	28 (45.16%)	16 (25.81%)	62 (100.0%)
男性	19 (27.14%)	32 (45.71%)	19 (27.14%)	70 (100.0%)
合計	37 (28.03%)	60 (45.45%)	35 (26.52%)	132 (100.0%)

このように今回は、調査時点で恋人のいない人が全体の約7割を占める結果となった。これは上記に挙げた高坂（2011）や余田（2016）と同様の比率となった。

### 性別、条件群ごとの調査結果比較

本研究では「性別」、「恋人の有無」の2要因による分散分析を行い、「性別」、「恋人の有無」、「性別×恋人の有無」の3つの観点から実験参加者が24特性の中から何を恋人に対して期待しているのかを検討した。この場合の実験参加者が恋人に対してどの程度期待しているのかを示す得点を以降、期待得点と呼ぶ。

Table 2は条件群ごとに24特性の期待得点の平均値と標準偏差を男女別

で示したものである。なお、表の（ ）内は標準偏差を表している。平均値を見ると「お金持ちである」の現恋愛群と元恋愛群、「自分より容姿が悪い」以外の項目で平均値3点以上の高い結果が出た。加えて「信頼できる」の特性では女性、男性共に各条件群の中で比較的高い平均点が見られた。特に女性においては標準偏差が全て0.5以下で、多くの参加者が5点以上の高い得点を出したことが分かった。

次に期待得点における性別と恋人の有無による結果の差異を検討するため、上記2要因による分散分析を行った。Table 3は性別、恋人の有無、交互作用における24特性の効果量をそれぞれ示したものである。表中の\*は5%水準で有意差が出たことを示している。分析の結果、性別と恋人の有無による交互作用は見られなかった。しかし、「信頼できる」( $F(1,126)=8.640, p<.01, .064$ )、「優しい」( $F(1,126)=8.002, p<.01, .06$ )、「思いやりがある」( $F(1,126)=12.136, p<.001, .088$ )、「しっかりしている」( $F(1,126)=5.694, p<.05, .043$ )、「話がうまい」( $F(1,126)=4.145, p<.05, .032$ )、「リーダーシップがとれる」( $F(1,126)=5.484, p<.05, .042$ )、「頭がよい」( $F(1,126)=7.787, p<.01, .058$ )、「お金持ちである」( $F(1,126)=20.394, p<.001, .139$ )、「自分より容姿が悪い」( $F(1,126)=8.216, p<.01, .061$ )の9特性において男性の得点よりも女性の方が有意に高かった。加えて、恋人の有無においては「正直である」の特性で有意な主効果が見られた( $F(2,126)=4.151, p<0.18, 0.062$ )。多重比較(Bonferroni法5%水準)を行ったところ、現恋愛群の得点が元恋愛群よりも高いということが分かった。

Table 2. 群別の24特性の期待得点の平均値と標準偏差

	女性			男性		
	現恋愛群	元恋愛群	未恋愛群	現恋愛群	元恋愛群	未恋愛群
信頼できる	5.67(0.49)	5.75(0.44)	5.69(0.48)	5.37(0.76)	5.41(0.56)	5.42(0.69)
優しい	5.44(0.62)	5.36(0.62)	5.44(0.63)	5.21(0.92)	4.94(0.88)	4.89(0.94)
思いやりがある	5.50(0.51)	5.32(0.72)	5.75(0.45)	5.26(0.81)	5.00(0.76)	4.95(0.91)
話しやすい	5.67(0.69)	5.50(0.79)	5.56(0.63)	5.47(0.90)	5.09(0.96)	5.42(0.84)
しっかりしている	5.17(0.86)	4.82(1.12)	5.19(0.91)	4.53(1.35)	4.53(0.98)	4.74(1.15)
友達を大切に する	5.44(0.51)	5.25(0.75)	5.19(0.91)	4.84(1.46)	4.91(1.06)	5.16(0.83)
明るい	4.83(0.79)	4.46(0.84)	4.38(1.20)	4.68(1.25)	4.31(1.35)	4.63(1.16)
性格に裏表が ない	4.72(1.02)	4.29(1.05)	4.75(1.29)	4.42(1.22)	3.91(1.35)	4.32(1.49)
正直である	5.17(0.86)	4.71(0.81)	4.88(0.89)	5.26(0.81)	4.56(1.01)	4.68(1.34)
おもしろい	4.94(1.06)	4.61(1.13)	4.38(1.20)	4.11(1.70)	3.88(1.41)	4.63(1.01)
気さくである	4.78(0.94)	4.79(0.96)	4.56(1.21)	4.53(1.39)	4.09(1.12)	4.53(1.12)
清潔である	5.11(1.02)	5.43(0.74)	5.25(1.00)	5.16(1.01)	5.00(0.88)	4.63(1.26)
気配りができる	4.94(0.80)	5.00(0.67)	5.19(0.75)	4.89(0.94)	4.47(1.14)	4.95(1.22)
話がうまい	4.11(1.28)	4.68(1.09)	4.50(1.15)	3.95(1.47)	3.56(1.29)	4.42(1.12)
容姿がよい	3.83(1.20)	4.54(1.04)	3.88(1.09)	4.21(1.72)	4.22(1.29)	4.42(1.35)
スポーツが できる	3.89(1.02)	3.89(1.23)	2.81(1.33)	3.16(1.71)	3.13(1.48)	3.05(1.39)
聞き上手である	4.44(1.29)	4.79(0.88)	4.63(0.89)	4.47(1.43)	4.13(1.04)	4.58(1.02)
おしゃれである	4.00(1.08)	4.11(0.99)	3.69(1.08)	4.16(1.83)	3.47(1.27)	3.74(0.99)
リーダーシップ がとれる	3.89(1.18)	3.68(0.98)	3.88(1.09)	3.32(1.63)	2.97(1.26)	3.58(1.35)
つきあいがよい	4.44(1.10)	4.71(0.85)	4.50(1.15)	4.53(1.26)	4.25(1.27)	4.53(1.12)
頭がよい	3.61(1.38)	3.89(1.07)	4.31(1.01)	3.32(1.70)	3.25(1.34)	3.26(1.37)
お金持ちである	3.50(1.29)	3.82(1.19)	3.75(1.06)	2.42(1.35)	2.44(1.05)	3.16(1.64)
自分より容姿が 悪い	2.33(1.28)	2.89(1.17)	2.63(1.15)	2.11(1.37)	2.03(1.12)	1.89(0.99)

Table 3. 性（２）×恋人の有無（３）の２要因の分散分析の結果

	性別		恋人の有無		
	女性	男性	現恋愛群	元恋愛群	未恋愛群
信頼できる	5.71*	5.40*	5.51	5.57	5.54
優しい	5.40*	5.00*	5.32	5.13	5.14
思いやりがある	5.48*	5.06*	5.38	5.15	5.31
話しやすい	5.56	5.29	5.57	5.28	5.49
しっかりしている	5.02*	4.59*	4.84	4.67	4.94
友達を大切に する	5.29	4.96	5.14	5.07	5.17
明るい	4.55	4.50	4.76	4.38	4.51
性格に裏表が ない	4.53	4.16	4.57	4.08	4.51
正直である	4.89	4.79	5.22*	4.63*	4.77
おもしろい	4.65	4.14	4.51	4.22	4.51
気さくである	4.73	4.33	4.65	4.42	4.54
清潔である	5.29	4.94	5.14	5.20	4.91
気配りができる	5.03	4.71	4.92	4.72	5.06
話がうまい	4.47*	3.90*	4.03	4.08	4.46
容姿がよい	4.16	4.27	4.03	4.37	4.17
スポーツが できる	3.61	3.11	3.51	3.48	2.94
聞き上手である	4.65	4.34	4.46	4.43	4.60
おしゃれである	3.97	3.73	4.08	3.77	3.71
リーダーシップ がとれる	3.79*	3.23*	3.59	3.30	3.71
つきあいがよい	4.58	4.40	4.49	4.47	4.51
頭がよい	3.92*	3.27*	3.46	3.55	3.74
お金持ちである	3.71*	2.63*	2.95	3.08	3.43
自分より容姿が 悪い	2.66*	2.01*	2.22	2.43	2.23



## 考察

本研究の目的は恋人の有無によって、個人が恋人に求める特性に差が見られるのかを検討することであった。加えて、先行研究の結果から性差に関しても検討した。その結果、性差に関しては23特性のうち9特性において有意差が見られたが、恋人の有無に関しては1特性のみに有意差が見られた。本研究では実験参加者に仮定の恋人への理想を質問したためか、女性では6特性、男性では7特性を除いて期待得点が4点を上回った。理想という条件下では男女ともに高い期待を持っていると考えられた。「恋人の有無」に関しては有意差が見られた特性が「正直である」のみであることから、本研究では「恋人の有無」と恋人に求める特性には有意な関係があまり見られなかった。

男女で有意差が出た「信頼できる」、「思いやりがある」、「優しい」の3特性は男女ともに期待得点が4.5点以上と高かったが、女性についてはすべて5点以上と男性よりも有意に高かった。この3特性は豊田(2004)でも評価の高い特性であった。このことから、この3特性は女性が特に重視する特性であると予測できる。

「話がうまい」については効果量が.032と小さいが有意差が見られた結果となった。加えて、コミュニケーション能力に含まれる「聞き上手」では、有意差は出なかったが男女ともに支持されていた。先行研究の戸塚(2014)においても、女性から好かれる男性像として「聞き上手」とともに「話がうまい」が支持されていた。「聞き上手」と「話がうまい」の2特性が求められていることから、女性は男性に対して高いコミュニケーション能力を期待している可能性がある。

「しっかりしている」、「リーダーシップがとれる」、「頭がよい」、「お金持ちである」の4特性については女性の期待得点が男性のデータよりも有意に高かった。特に「お金持ちである」では性別における効果量が.139と比較的高い数値が見られた。今井・森田(1996)による大学生の恋愛対象・

結婚対象の理想像として、女子学生にのみ「経済力がある」、「頼れる」といった回答が見られた。この結果から、彼らは現代の女性の独立志向とは異なり、女性には男性への依存傾向がまだ残っていると指摘していた。また、ヘンドリックら(2000)は進化論的主張の観点から考えを述べている。普通、女性は子供たちの保護を確保し、育てることに関心を向ける為、現代の社会における男性の「経済力」や「地位」に興味を持つのだと示した。本研究でも、女性の頼れる男性像への期待、もしくは将来の生活を営むための計画性が出ていると考えられる。

「容姿がよい」については男女差が見られなかった。「自分より容姿が悪い」については女性の方が男性よりも有意に期待得点が高かった。このことは男性の方が容姿の悪さを許容しないことを示唆している。高坂(2010)では「外見的魅力(外見が魅力的であること、スタイルがよいことなど)」について、男性参加者の期待得点が女性参加者よりも有意に高い結果であり、本研究の結果と一致している。Ariely(2010)は外見的魅力で似た者同士が付き合う「同類婚」と呼ばれる現象についてマッチングサイト上で調査を行った。その結果、容姿が恵まれた人は同じく容姿が恵まれた人同士、そうでない人はそうでない人同士で付き合うことが多いことが分かった。このような現象はマッチング仮説とも呼ばれる。その中で、男性は自分の魅力度を気にせず自分よりも数ランク上の相手を狙うことが女性よりも多かったという。このことから相対的に女性は自分の魅力度と比較して、同程度かやや劣る程度の男性を狙うことで、高望みをして相手から振られるリスクを回避する傾向があるのではないかと考える。

「恋人の有無」において唯一有意差が出た「正直である」については全条件下で期待得点4.5以上と高い結果となったが、現恋愛群が元恋愛群よりも有意に高い数値が見られた。多川(2003)によると恋愛関係が対人関係観に与える影響として「本音を素直に語るようになった」が挙げられた。本研究では今までの交際人数や交際期間については質問していないが、現恋愛群に上記のような価値観の変化が起こったため、現恋愛群と

元恋愛群の得点間に差が出たのではないかと考えた。また、高坂（2009）は恋愛関係が大学生に与える影響の1つとして相手との関係崩壊を恐れるあまり、相手の言動がいつも気になるなど、不安や嫉妬のようなネガティブな感情を抱く「関係不安」を挙げた。これをふまえると、本研究では現恋愛群が上で述べたような不安を感じているために、相手に対して正直であることを期待しているという結果が出た可能性も考えられる。

現恋愛群と元恋愛群の間に1項目だけではあるが有意差が生じた理由として、文脈の効果が考えられる。恋人に求める特性に関して、オンライン上のプロフィールなどを閲覧する非直接的な文脈と現実に関わり合う直接的な文脈では相手の評価と恋人に求める特性の一致度に変化することが明らかとなっている（Eastwick, Finkel, & Eagly, 2011）。現恋愛群の参加者は、現在の恋人の次について想定し回答するため、抽象度が高くなっている可能性が考えられる。一方で元恋愛群の参加者が想定する対象は可能であればすぐにでも出会いたい相手となり、具体性がより高くなるだろう。このことから、両群間の恋人に求める特性に差が生じたのかもしれない。

本研究では「恋人の有無」による学生の恋人に求める特性への影響は限定的ではあったが、「性別」による影響は多少見ることが出来た。「恋人の有無」による影響があまり見られなかったことについて、原因が2つ考えられる。一つ目は質問項目として使用した特性が恋愛関係を想定したものではないことである。今回使用した24特性は豊田（2004）の研究で「異性に好かれる男女の理想像」の特性として構成されたものである。この時の「好かれる」には恋愛関係の「好き」であるとは言及されていなかったため、恋愛関係以外の「好き」も含まれていた。そのため本研究で期待された結果が出なかった可能性がある。高坂（2010）で質問内容として使用された「自分を認めてくれること」、「お互いに支えあえること」などの両者関係における具体的な内容を設定することで、現恋愛群・元恋愛群と未恋愛群の間に恋愛経験の有無による差が見られる可能性がある。二つ目は条件を増やしすぎてしまったことである。本研究では「性別」と「恋人

の有無」の2要件の最大6条件で分析してしまったため、条件によっては実験参加者16人になってしまいデータが収束しなかった可能性がある。「性別」条件に関しては有意差が出たので、男女別に「恋人の有無」条件を調査することで更なる知見が得られるのではないかと考えられる。

本研究では女性が恋人に対して、男性よりも強く期待し特性が9特性見られた。豊田（2004）では「男性から好かれる女性像」で支持された特性が18特性だったのに対して、「女性から好かれる男性像」では22特性で、女性の方が男性に求める特性が多かった。このことから女性は男性に対して多くの基準を持ち、こだわりや理想を持っていることが分かった。

今回の研究では、恋愛経験の指標として調査時点の「恋人の有無」に注目したが、今までの交際人数や交際期間、最後の交際相手がいつの時の恋人かで結果が変化する可能性がある。例えば、同じ現恋愛群でも、初めての交際と何回かの交際経験を経ての交際とでは価値観の差が出てくると考えられる。上記の観点からの「恋人に求める特性」への影響も視野に入れて検討する必要がある。

## 引用文献

- 天谷裕子（2005）. 恋人と結婚相手に対して求めるものの違い：性差と恋人の捉え方・恋愛経験の有無から 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 52, 9-19.
- Eastwick, P. W., Finkel, E. J., & Eagly, A. H. (2011). When and why do ideal partner preferences affect the process of initiating and maintaining romantic relationships?. *Journal of personality and social psychology*, 101 ( 5 ), 1012-1032.
- Eastwick, P. W., Finkel, E. J., & Simpson, J. A. (2019). Best practices for testing the predictive validity of ideal partner preference-matching. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 45 ( 2 ), 167-181.
- Hendrick, S. S., & Hendrick, C. (1992). *Romantic love*. Thousand Oaks, CA: Sage. (ヘンドリック S.S.&ヘンドリック C. 斎藤勇（監訳）・奥田大三（訳）(2000)「恋愛学」講義 金子書房.)
- 今井靖親・森田健宏（1996）. 大学生の恋愛観・結婚観 教育実践研究指導総合センター紀要, 5, 15-22.
- 高坂康雅（2009）. 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と、交際期間、関係認知との関連 日本パーソナリティ心理学会 パーソナリティ研究, 17 ( 2 ), 144-156.

- 高坂康雅 (2010). 大学生における同姓友人, 異性友人, 恋人に対する期待の比較 日本パーソナリティ心理学会 パーソナリティ研究, 18 (2), 140-151.
- 高坂康雅 (2011). “恋人を欲しいと思わない青年”の心理的特徴の検討 青年心理学研究, 23, 147-158.
- 多川則子 (2003). 恋愛関係が青年に及ぼす影響についての探索的研究—対人関係観に注目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学 50, 251-267.
- 戸塚唯氏 (2014). 恋人の性格特性に関する許容範囲 千葉科学大学紀要, 7, 49-58.
- 豊田弘治 (2000). 大学生における好かれる男性及び女性の特徴 奈良教育大学教育研究所紀要, 36, 73-76.
- 豊田弘治 (2004). 大学生における好かれる男性及び女性の特徴—評定尺度による検討— 教育実践総合センター研究紀要, 13, 1-6.
- 余田翔平 (2016). 異性との交際 第15回出生動向基本調査結果の基本概要, 国立社会保障人口問題研究所 (編・発), 21-25.
- Dan Ariely (2010) 櫻井裕子 (訳). 不合理だからすべてがうまくいく—行動経済学で「人を動かす」— 早川書房.
- Yijun Jin (2009). 青年期における恋愛相手の選択基準とアイデンティティ発達との関係, 立教大学心理学研究紀要, 51, 131-142.

